

# 琵琶湖とチャオプラヤー川をつなぐ水環境ビジネス

texted by 滋賀銀行 バンコク駐在員事務所 ピヤヌット チラワットピンヨー

昨年の秋、タイから研修で「びわ湖環境ビジネスメッセ2013」(2013年10月、長浜ドームで開催)を訪問し、日本には環境をテーマにしたさまざまな技術があることに驚きました。工業化が進むタイでも環境保全について関心が高まっています。特に私たちの生活に関わる水質保全是重要な問題となっています。日本とタイの環境ビジネスについてレポートします。



ワットアルン(暁の寺)から見たチャオプラヤー川。水面を走るボートは市民の大切な足だ

## ジャカルタ交通事情

インドネシアの首都ジャカルタの交通事情は凄惨を極めている。数キロ先へ移動するのに1時間以上かかるといった渋滞が頻発。それも突発的に起こるため、移動時間がまったく読めない。

高速道路の車両通行台数を日本と比較すると、ジャカルタ〜スカルノハッタ国際空港間は名神高速大山崎IC〜吹田IC間の2倍超に上っている。渋滞の最大の要因は車両台数に比べ道路面積、つまり車線の数が不足していることだ。加えて、交差点に信号が少ない、自動車・バイク以外の公共交通手段が少ないといった状況も渋滞誘発の一因であり、国・地方自治体はソフトとハードの両面対策を講じている。

ソフト面では、車両が集中する平日朝・夕の時間帯は相乗りすることで車両数の削減を図ろうと、3人以上の乗車を必須とする「3 in 1 規制」を導入。しかし「ジョッキー」と呼ばれる乗車人数合わせの同乗商売が横行し、規制は形骸化している。今後は都市部へ入る車両への電子課金を検討しているが、導入時期は未定だ。ハード面では、トランスジャカルタというバスの専用レーンを設置し通行量の削減を試みたが、道路を拡張せずにレーンを設置したため道路幅が狭くなり、渋滞解消には至っていない。

現在、インドネシア政府は日本の支援により「首都圏投資促進特別地域(MPA)構想」を推進し、インフラ整備による渋滞解消を画策している。ジャカルタへの通勤用地下鉄や空港への鉄道敷設を含む大規模な計画で、事業総額は410兆ルピア(約3兆6,900億円)に上る。ただ、過去の事業において賄賂や不正流出によりインフラ整備が中断、延期されたという経緯もあり、2018年開通予定に間に合うかは不透明な状況だ。また、国内各所に建設中の高速道路も土地収用問題の影響で工事が遅延しており、完成のめどは立っていない。渋滞解消には今しばらく時間がかかりそうだ。

(しがぎんアジア月報1月号より インドネシア研修生 大西)

路線区間	車両数 (千台/日)	距離	
ジャカルタ市内〜スカルノハッタ国際空港	561	約22km	2012年
ジャカルタ市内〜主要工業団地	532	約30km	2012年
<参考> 大山崎IC〜吹田IC	234	約20km	2010年

出展: Jasa Marga社HP及び国土交通省資料より作成



道路沿いに並ぶ「ジョッキー」。値段は1万〜2万ルピア(約90〜180円)

## 「びわ湖環境ビジネスメッセ」訪問

「びわ湖環境ビジネスメッセ2013」(10月23日〜26日開催)では環境をテーマにしたさまざまな展示があり、製造業からサービス業に至るまで幅広い企業が出展していました。16回目の開催ということですが、年々出展者が増えているそうです。出展者による展示だけでなく、環境分野での海外進出をテーマにしたセミナーも開催されていて、日本の技術を積極的に世界に輸出しようとしていることもわかりました。

展示されていた製品の中でも、工業廃水に対して薬剤が不要な電解イオ

ン水浄水システムや、除去が難しい排水中の汚染物質を除去する凝集剤など画期的な水処理に挑戦されている企業に特に興味を持ちました。タイではまだ工業は有機溶剤や洗剤を大量に使うことが主流だからです。滋賀県は琵琶湖があることで特に水環境ビジネスに力を入れておられるのだと気づきました。

## 琵琶湖とチャオプラヤー川

メッセ会場の長浜ドームに行く際、車で琵琶湖岸を走り、琵琶湖初めて見て青く輝く湖面の色に感動しました。

今の琵琶湖からは想像できません

が、1977年に「淡水赤潮」が発生し、大きな問題となったことを教えていただきました。そして、官民共同による保全活動で琵琶湖がきれいになったことを知り、この経験が新しい技術の開発につながったのだと思いました。

滋賀銀行でもニゴロブナの放流や外来魚駆除、ヨシ刈り等の活動を行っています。今回の訪問で琵琶湖の環境を守るために自治体や県民、企業、大学がさまざまな活動をしていることがよくわかりました。琵琶湖の水は滋賀県の人だけでなく、京都、大阪の人々も利用しており、関西の人にとってなくてはならないものだということがわかりました。



「びわ湖環境ビジネスメッセ2013」で、滋賀銀行のブースを見学



初めて見る琵琶湖に感動。環境保全の取り組みについて学びました

私の住むタイには、流域面積が約16万km<sup>2</sup>(琵琶湖面積の約240倍)、国土の30%以上にもなるチャオプラヤー川があります。タイはこの大河を灌漑用水や水運による交易に利用し発展してきました。首都バンコクは最下流域にあり、自動車が普及した今でも、チャオプラヤー川を走るボートは重要な市民の足です。また琵琶湖と同じくこの川の水を生活用水としても利用しています。しかし近年は水質汚染が激しく、問題となっています。

## タイのこれからの環境保全

その原因は下水道の未整備です。タイでは下水道の普及率は8割を超えています。生活排水や産業排水の一部はそのままチャオプラヤー川に流れ込みます。これまで水源の確保を重視する一方で、排水処理システムの発展が追いついていなかったためです。チャオプラヤー川の水質改善のために、今後は下水道施設の整備にも力を入れていく必要があります。

実際、タイでも廃水処理への関心が

高まっています。水環境ビジネスに特化した展示会「Water Expo」が2012年から開催され、工業団地の排水処理を行う企業や水道管理を行う企業等、さまざまな水に関する企業が出展しています。出展企業数は2012年が99社、2013年が233社と大幅に増加しています。また「3W Expo 2013」という排水処理と廃棄物処理技術を紹介する展示会も2013年から始まっています。いずれの展示会も「びわ湖環境ビジネスメッセ」の16回には及びませんが、今後の継続、発展が期待されます。

今回の訪問によって、琵琶湖の美しさに目を奪われました。滋賀の各地域に生活する人々は地域の環境保全に対して関心を持ち、環境を良くしようと活動されています。環境を守る技術と、自然を守りたい、環境を良くしたいと思う人たちのたゆまぬ努力が大切だと思いました。タイもこれからは経済成長だけでなく、環境保全にも目を向けていかなければなりません。より良い環境を作るために、日本の技術とともに日本人の活動も見習う必要があると強く感じました。